

スコットランドのハイランド地方

前編

古戦場カロデンを征く

ハイランド Highland とは、「高地地方」と訳語がつけられることもあるスコットランド北部を指す言葉だ。文字通り、標高は高めで岩がちな荒々しい山肌を見せる区域が少ない。この地方が歩んできた歴史のうち、18 世紀に焦点を当てつつ、ハイランドならではの景観が広がる地を今号と次号でご紹介することにしたい。

※写真はカロデンの戦場跡。約 280 年前、多くのハイランド兵士の血が流れた。



スコットランド王ジェームズ 6 世 (James Charles Stuart 1566 ~ 1625) は、エリザベス 1 世暗殺をもくろんだ罪で処刑された母、スコットランド女王メアリー (カトリック教徒) とわずか 1 歳の時に引き離され、プロテスタントとして厳格な教育を受けて育った。偏屈な性格だったといわれている。

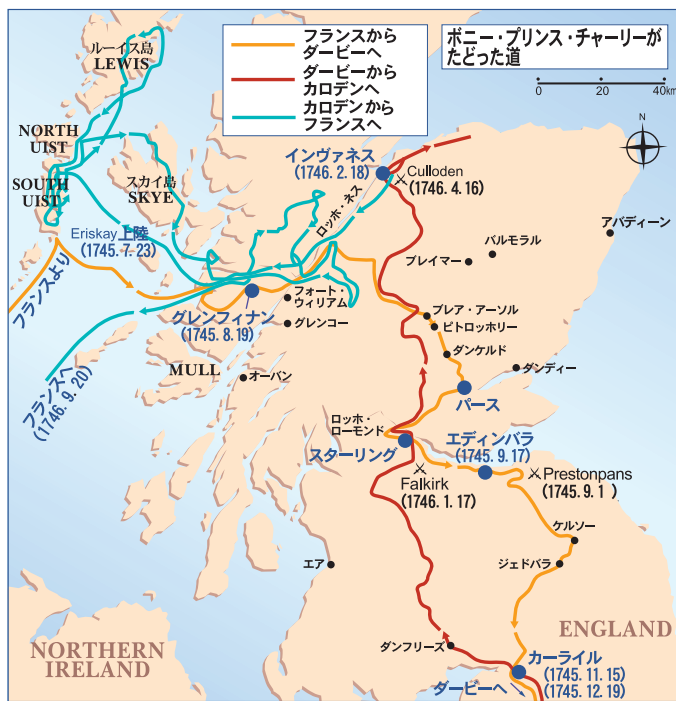
スコットランド北部に広がるハイランドは、なだらかで緑豊かなイングリッドとは印象が異なり、やせた土地と厳しい気候条件の中での暮らしは楽ではないことを推測させる。しかし、息をのむほど見事な景観を備え、また、後世に語り継がれる歴史をつむいできた地でもある。スコットランド史をふりかえる時、18 世紀前半は、もつともドラマチックに語られるピリオドのひとつと言え、その舞台となったのもハイランドだった。

すべては、イングリッド女王エリザベス 1 世 (在位 1558 ~ 1603) が独身のまま、世継ぎを残さずこの世を去ったことに端を発する。これを受けて、スコットランドのステュワート王家出身のジェームズ 6 世 (在位 1567 ~ 1625) が、イングリッド国王を兼ねるといふ、スコットランド人が夢にまでみた出来事が現実のものとなった。

それまでイングリッドにはジェームズという名の国王はいなかったため、同王はイングリッドではジェームズ 1 世と名乗ることになったのだが、この出来事がいかに大きいことだったか。イングリッドという強大な隣国に常に虐げられてきたスコットランドの君主が、イングリッドの頂点に立つという悲願が思わぬ形で成就したのだった。しかし、わずか約 100 年で、その



平和をとるか、独立をとるか
18 世紀の選択



イングラランドとの争いが終結し、平和がもたらされたという意味では、確かに統合は有効だった。平和を国益と考えるのであればある。しかし、これを屈辱的と受け止めたスコットランド人たちは当然多かった。

1688年の「名誉革命」で、ス

夢は終わりを告げる。1707年、スコットランドがこの宿敵イングランドとともに統合されてしまったためだ。スコットランドの歴史は、強国イングランドへの抗戦の歴史であり、この「統合」という名の併合が行われたことにより、スコットランドは、とうとう実質的な独立国家ではなくなってしまうた。

不思議はない。彼らは「ジャコバイト (Jacobite)」と呼ばれた。「James」のラテン名「Jacobus」を起源とする「ジャコバイト」は、そのまま反イングランドを意味する。イングランドからすれば「ジャコバイト」イコール反逆者であつ

アリーは
ジェームズ
2世の実の
娘だった）
がイングラ
ンド統治を
始めた後も、
スチュワート
王家を支持し
続けるスコ
ットランド人
が少なくなっ
たのも



A portrait of James Francis Edward Stuart, also known as the Old Pretender. He is depicted from the chest up, wearing a blue coat with a gold brocade waistcoat and a white cravat. He has long, wavy, light-colored hair. The background is dark and indistinct.

チュワート王家出身の
 ジェームズ2世(在位
 1685~1689。ス
 コットランド王としては
 ジェームズ7世)が追放
 され、オレンジ公ウイ
 リアムとメ
 アリー2世
 (共同統治
 1689~
 1702。



◀ 12歳当時のボニー・プリンス・チャーリー(スコティッシュ・ナショナル・ポートレート・ギャラリー蔵)。

ト王家再興を
かけて、ジャ
コバイトたち
が、初めて蜂
起したのは
1715年。
しかし、亡
命先のフラ
ンスにいた、
ジェームズ
7世の息子、
ジェームズ・
フランシス・
エドワードは
スコットラン
ド入りがひと
月も遅れるな
どし、蜂起は
結局失敗に

グレンフィナン・モニュメント
Glenfinnan Monument (National Trust for Scotland)

Glenfinnan, Lochaber, Highland Council PH37 4LT
www.nts.org.uk/visit/places/glenfinnan-monument

◆シール湖（Loch Shiel）のほとりに建つ高さ 18 メートルのモニュメントは 12 月 24 日～26 日、12 月 31 日～1 月 1 日をのぞき、毎日そばまで歩いていくことができる。

◆モニュメントの中は登れる構造になっているが不定期に閉まるので、ビジターセンターで要確認。

◆カフェを備えたビジターセンターあり。5月～9月末まで 9:30～18:00 オープン（10月、11月は 17:00 まで。冬期は 16:00 まで）。

◆入場料は大人 5 ポンド、子ども 4 ポンド、大人 2 人を含むファミリー・チケット 13 ポンド（ショナル・トラスト・フォー・スコットランド会員は無料）。

◆「ハリー・ポッター」の映画内で魔法学校に向かうホグワーツ特急が走るシーンで有名な高架鉄道 Railway Viaduct（ヴァイアドクト）より近いことから、ハリポタファンも多く訪れる。かなりの坂道を歩くことになるが、ビジターセンターからグレンフィナン鉄道駅まで約 1 キロ。



チャールズ3世の運命を
変えたかも知れない決断



夢をかけて武器をとったのはその30年後のことだった。

1745年、波乱の18世紀前半をしめくくることになる出来事は、ひなこットランドに渡ってきたことから始まった。

終わる。ジャコバ
イトたちが、再び

ことの無謀さを説き、「Please go home. (ローマにお帰りください)」と嘆願した有力クランの族長や長老たちに対して、「I'm come home. (私は故郷に帰ってきたのだ)」と答えたという逸話が残っている。

ハイランド（スコットランド北部）を拠点とするジャコバイト派のクラン（氏族）のメンバーたちが続々と集まり、その数はすぐに2000（後には8000）に達した。中には、自分の属するクランの族長の命令に反し、プリンス軍に加わる者もあったという。

1788)。1715年のジャコバイトの蜂起（フィフティーンズ）が鎮圧され、正式に即位することのなかったジェームズ8世の長男として1720年12月31日、ローマで誕生した。

「ボニー・プリンス」（ボニーは「美しい」の意）と呼ばれたほど、顔立ちの整った貴公子だった。彼は、イングランドと常に敵対していたフランスから援軍を頼みにしつつ、1745年8月19日、スコットランドのグレンフィナンに上陸。スコットランド王室

Travel Information

※ 2026 年 6 月 15 日現在

インヴァネス *Inverness*



スコットランドの主要都市として、エディンバラ、グラスゴー、アバディー（ハイランドには含まれない）、ダンディーが「ビッグ4」に挙げられ、それら

に次ぐパースに続く都市であり、「ハイランドの首都」ともいわれるのがインヴァネスだ。ネス川の河口（インヴァ）にある。ネス湖に近いことから、年々で観光客が絶えない町であり、カロデン古戦場に通行の拠点とするのにも便利な場所。 www.explore-inverness.com



【道路】 ロンドンからインヴァネスまで約 570 マイル（約 912 キロ）。飛行機でエディンバラやインヴァネスまで飛び、レンタカーを借りるのが現実的。

◀ インヴァネス・タウン・ハウス

◆ 町に残る歴史的建造物は比較的新しい。19 世紀建造でネス川のほとりにたつ大聖堂 Inverness Cathedral、18 ～ 19 世紀に増改築されたタウン・ハウス Inverness Town House のほか、改築中のインヴァネス城 Inverness Castle、博物館・アート・ギャラリー Inverness Museum & Art Gallery などもある。は屋内マーケットで

◆ 近郊にあるネス湖



▲ネス湖のほとりに建つ廃墟、アーカート城 Urquhart Castle。ネッシーのおかげで知名度は国際クラス。

また、ヴィクトリア・マーケット
フードホールもあって重宝する。
は、ネッシーであまりにも有名。

いかにも聡明そうなフローラ・マクドナルド。胆力も持ち合わせていた。



プリンスにしてみれば、グレンフィナンで目にしたのは、感無量の光景だっただろう。弱冠25歳、スチュワート家の正統後継者とはいえ、それまでスコットランドに住んだこともなく、統率能力の有無も不確定（実戦経験は少々ありという程度）だった彼に命を投げうってでもついでにこうとする者が、これだけ集まったのである。

パース、スターリング、エディンバラとプリンス軍は順調に進軍。イングランド軍との小競り合いに勝利をおさめつつ、カーライル、プレストン、マンチェスター、そしてロンドンからわずか120マイルのダービーへと歩を進めた。旗揚げから約5カ月後、12月4日のことだった。ハノーヴァー朝2代目のイングランド王、ジョージ2世（在位1727〜1760）は、この報を聞くなりロンドン脱出を考えたといわれ、ロンドンもパニック状態に陥ったという。

ところが、プリンス軍の計画性のな



●ネットフリックスなどで人気を博した連続ドラマ「アウトランダー Outlander」。2026 年上半期に最終シリーズとなる第8シーズンが放映された。

●原作はダイアナ・ガバルドンの小説で、第2次世界大戦中、従軍看護師として生きる主人公クレアが、18 世紀のスコットランドへタイムスリップし、激動の歴史に巻き込まれるという筋書き。

●医療知識と技術を駆使して人々を救う一方、フレイザーというクラン（氏族）に属するジェイミーとの愛を育んでいくロマンス大作でもある。

●この作品の影響で、カロデンを訪れるファンが急増。カロデン内にある、フレイザー兵たちを追悼する小さな石碑の前には花が置かれていた（他のクランの石碑に手向けられた花より、数が圧倒的に多かった！）。

さが露呈する。補充物資の欠乏と本格的に寒さを憂えたプリンスの参謀たちはここで引き返す道を選ぶ。歴史に「もし」は禁句で



「ブッチャー」との戦いに敗れて

このダービーの後、流れは完全にイングランド側優位へと変わる。ひたすら北進するプリンス軍に対するイングランド軍の追撃が開始された。そして、1746年4月16日。飢えと疲労にさいなまれるプリンス軍5000と、カンバード公率いるイングランド軍9000は、インヴァネス郊外のカロデンという荒れ野で決戦の時を迎える。

結果は、プリンス軍の惨敗であった。負傷者や捕虜にまでも容赦なかったカンバード公は「ブッチャー（屠殺人）」とあだなされたほどの陰惨な戦いで、落ちのびたボニー・プリンスの首には3万ポンド（現在の100万ポンド以上に相当する）の賞金がかけられた。

しかし、ハイランドの人々はボニー・プリンスを最後まで裏切りはしなかった。ナショナル・ロッタリーのジャックポット（特賞、並みの賞金に、目がくらんだりする者が皆無だったことは驚きに値する。カロデンで敗れてから、プリンスはなんと半年もハイランドおよびスカイ島を始めとする島々を転々と逃げ続けたが、この間、さま

カロデン

Culloden (National Trust for Scotland)

Culloden, Inverness IV2 5EU

www.nts.org.uk/visit/places/culloden

- ◆カロデンの戦いに関する資料や展示が充実しているビジター・センターはクリスマスや新年をのぞき、毎日オープン。3月〜10月末まで9:00〜17:00（冬期は16:00まで）。
- ◆入場料は大人12.50ポンド、子ども8ポンド、大人2人を含むファミリー・チケット33ポンド（シヨナル・トラスト・フォー・スコットランド会員は無料）。
- ◆無料のガイド付きウォークに参加したい場合は、チケット売り場で確認すること。



カロデン・モニュメント。毎年、4月に追悼式が行なわれる。



1753年頃に描かれた「An Incident in the Rebellion of 1745」（デヴィッド・モリエ David Morier 作／ロイヤル・コレクション・トラスト蔵）。ハイランドの4月はまだ冬の気候。寒さと飢えに苦しみながら戦い、無残に敗れたプリンス軍兵士たちのことを思うと胸が痛む。



プリンス軍の前線があった場所を示す、濃紺の旗（イングランド軍の前線には赤旗）。プリンス軍の兵士たちは、味方かどうか識別するのに白いリボンを付けた濃紺のベレー帽を着用。イングランド軍兵士は赤い軍服姿だった。

1746年10月10日。ボニー・プリンス・チャールリーはようやくフランスに亡命。以降、スコットランドの地を再び踏むことはなかった。1766年には、父君が亡くなったのを機に自ら、英君主として「チャールズ3世」を名乗るも、フランスはこれに先駆けてハ



ローマに生まれローマに眠る

さまざまなハイランダー（ハイランドの人々）がプリンスの逃亡を、時には命をかけて助けた。

中でも、プリンスに女装させ自分の侍女と偽りともにスカイ島に渡った、フローラ・マクドナルド（Flora MacDonald 1722〜1790）は有名で、死と隣り合わせのこの逃避行はロマンと冒険に満ちたドラマとして、現在も語り継がれている（次号でさらに詳しくお届けする）。

ノーヴァー朝を正統な王室と認める条約を英国と結んでおり、ボニー・プリンスの宣言も空しく響くだけだった。

その6年後には、母方の家系がスコットランド王室の血を引く、ドイツのストルベルグ家のルイーゼ・マキシミリアーナ王女と結婚はしたが、子宝に恵まれず、不仲のまま晩年を迎えたとされている。

プリンスの晩年、約3年ほどは、別の女性との間にできた娘シャーロットがつきつきりで彼の世話をしたという。そして1788年1月31日、ボニー・プリンス・チャールリーは永遠の眠りにつき、ローマに葬られたのだった。生まれた時からスコットランド再興の夢を託されもがき続けたであろう、この王子の最期の時が穏やかなものであったことを願うばかりだ。

※この波乱に満ちた人生を送ったボニー・プリンス・チャールリーとゆかりの深いスカイ島について、次号で取り上げたい。